聖結晶姫
剣士
～戦慄の地下闘技場
逆襲される聖結晶～
18
ADULT ONLY

〇登場人物紹介

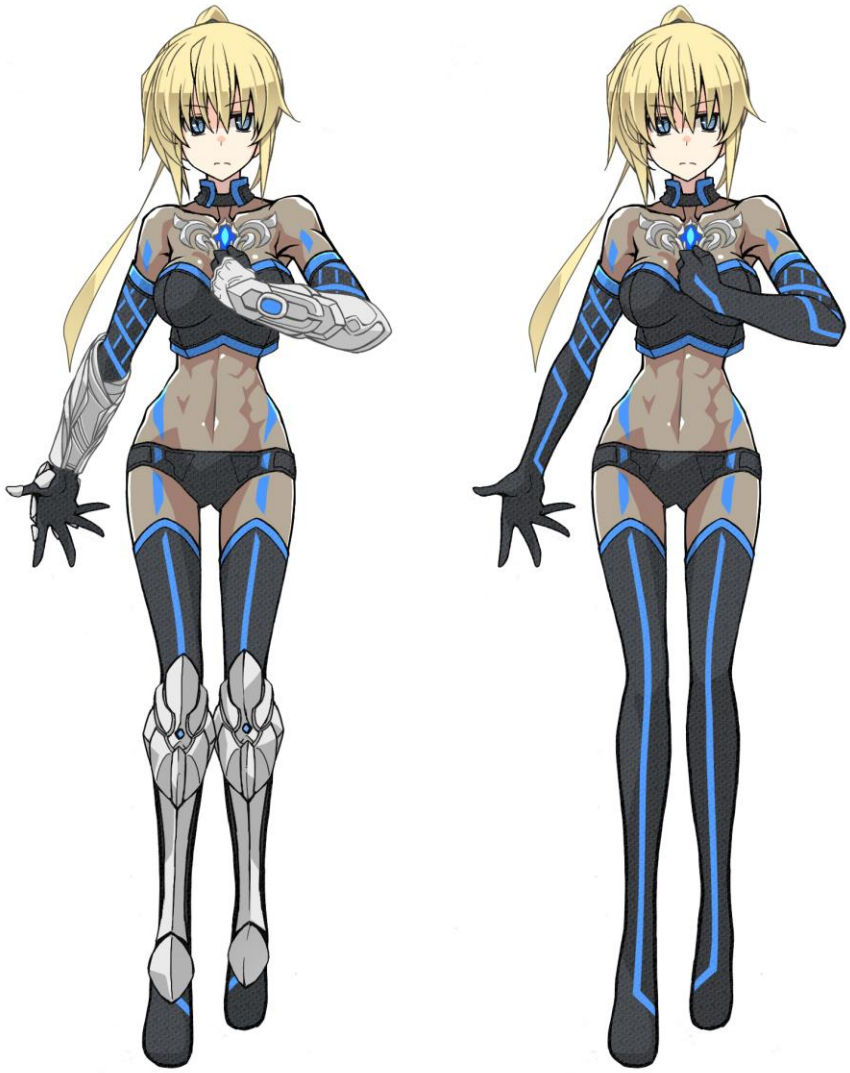
・蒼樹美月（あおきみつき）／マスク・ド・ミツキ

裏社会で暗躍する組織を潰すため、女格闘家として潜入する蒼樹美月の姿。
リングネームは「マスク・ド・ミツキ」。
その可憐な容姿とスタイルの良さもさることながら、スピードを武器とした圧倒的強さで連勝記録を塗り替え、地下闘技場注目のマトである人気のファイター。

身長：１６０センチ　体重：５０キロ
スリーサイズはB：８６ｃｍ（Ｄカップ）W：５９ｃｍ　H：８５ｃｍ

ちなみに美月本人は絶対にバレない完璧な変装だと思っている。

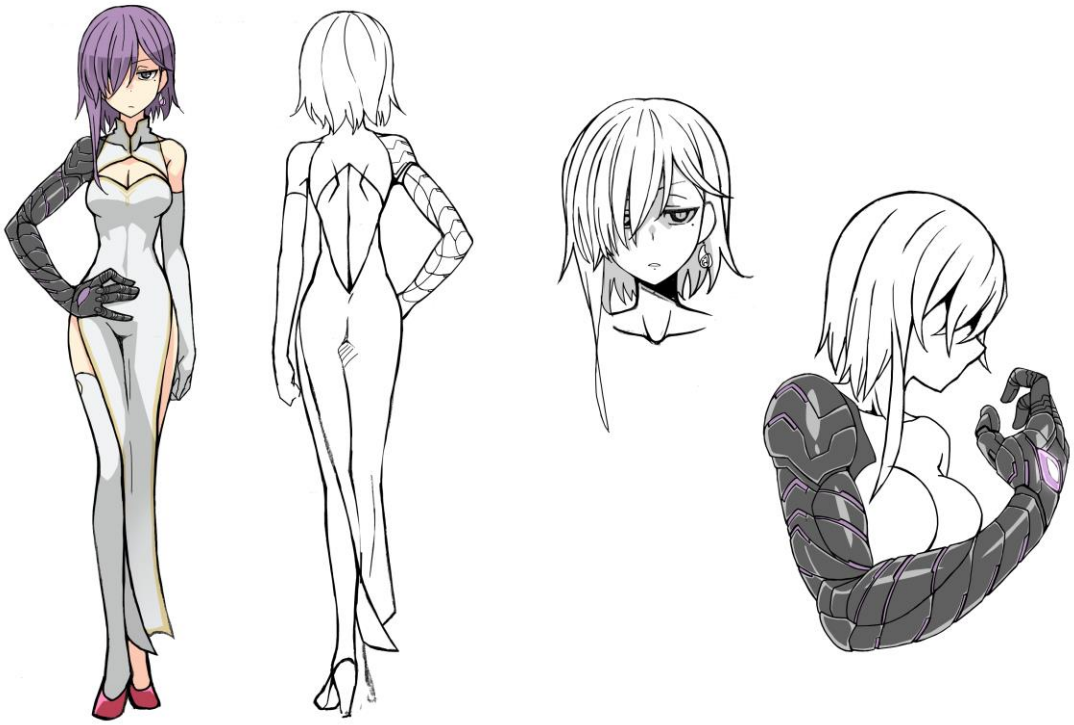
・聖結晶姫ミツキ



蒼樹美月がその身に宿る「聖結晶」の力を解放し変身したもうひとつの姿。
脅威的な身体能力と武装を駆使して無双の戦闘力を発揮する。
力の源である聖結晶はミツキの心に反応してエネルギーを生み出す奇跡の結晶体。
その能力はミツキの精神力に大きく左右され、快楽責めに弱い一面を持っている。

過去に朱麗蘭とは戦闘経験があり、その際は捕らわれの身となって調教を受けた苦い過去を持つ。
屈服直前まで追い込まれながらも、彼女の最大の武器である「不屈の闘志」によって反撃の糸口を掴み、その時は薄氷の勝利を得た。

・朱麗蘭（ジュウレイラン）



地下闘技場を牛耳る黒幕であり、過去にミツキにあと一歩というところまで追い込みながらも、不屈の闘志によって退けられた美女。
敗北の代償として切り落とされた右腕は義手となり、対聖結晶用の切り札にもなっている。
大陸の拳法と符術のほか、気の流れを読むことが得意であり、聖結晶のエネルギーにも干渉することができる強敵。

〇用語紹介
・科学都市
科学の発展のために研究所や病院、教育機関の集めた人口の浮き島。
かつては悪の組織「レギオン」によって裏から管理され、非人道的な実験場となっていた。

・レギオン
科学都市を牛耳っていた悪の組織。聖結晶姫ミツキの活躍により、組織は壊滅へと追い込まれたが、ミツキは過去に１度レギオンに敗れ、屈服調教を施されている。
※ミツキとレギオンの戦いについてはpixiv版聖結晶姫ミツキを読んで頂けるとよりお楽しみいただけます。
（http://www.pixiv.net/series.php?id=184272）

聖結晶姫ミツキ
～戦慄の地下闘技場、逆襲される聖結晶～

目次

序章：仕組まれていたリング
第一章：朱色美魔女の逆襲
第二章：魔結晶の悪夢
第三章：敗者に待つ恥辱
第四章：堕落の屈服宣言
終章：輝きを失った聖結晶

小説：北みなみ　挿し絵：おてるこ

序章：仕組まれていたリング

科学技術の発展を目的として作られた人工の浮島「科学都市」。しかし、その正体は悪の組織が数多存在する悪鬼の巣窟であった。
一部の人間の利益のために行われる非人道的な実験の数々。決して表には出ない犯罪がいくつも存在し、圧倒的な力の前に力無き人々は抵抗すら許されず命を落としてきた。
そして、今日もまた、あるひとりの少女の人生が終わろうとしていた。
度重なる調教によって抵抗する力を奪われ、男達の慰み者にされて喘ぎ泣き、穴という穴に精液を注ぎこまれる醜態を晒し続けている。誰がどう見ても少女は圧倒的な力の前に屈服しているようにしか見えない。この場にいる全ての者がそう思っていた。
だが、そんな地獄の中においてなお、少女だけは諦めなかった——そして、立ち上がったのだ。
「あなた達、覚悟はできているわね。もう、今までのようにはいかないわよ！」
清らかな水のように澄んだ少女の声が欲望にまみれた犯罪者達の集会場に響き渡る。その凛然とした姿に悪は慄き、同時に彼女の最大の武器である不屈の闘志を理解させられた。
「馬鹿な……なぜ、立ち上がれる……戦う意思も、女としての尊厳も、力の源も、全て奪ってやったはずなのに……」
つい先ほどまで、その少女は完全に堕ちていたはずだった。確かに苦しかった。辛かった。心が折れかけていなかったと言えば嘘になる。
しかし、少女はそんな日々の中でさえ最後まで希望を捨てず、敵の気付かない僅かな隙に賭けて耐え忍び、不死鳥のごとく復活を果たしたのだ。
神話に出てくる戦女神が実在するというならば、それは彼女のことだろう。
意思の強さを宿す切れ長の瞳は研ぎ澄まされた刃のようなクールさ感じさせる。彫りの深い高い鼻や、薄桃色の小さな唇を始めとする芸術的なパーツで構成された美貌はこの世のものとは思えない幻想的な雰囲気を纏い、戦いの場においてなお見惚れてしまうほど端正な顔立ちだった。
煌めく宝石をそのまま埋め込んだかのような碧眼と金糸を編みこんだかのようなブロンドのポニーテールの組み合わせは神々しさを際立たせ、長髪を纏める黒のリボンが年頃の少女らしさをワンポイントとして加える。
美の神に愛されているとしか思えない美しさは人形のような顔立ちだけでなく、起伏に富んだボディラインにも現れていた。
長身のグラマラスボディには首から爪先にかけて、極薄のビニールシートのようなインナースーツが貼りついている。伸縮性のある半透明のスーツ生地は肌理

細かい色白の肌の薄っすらと透けさ、同時にシェイプアップ効果を発揮することで少女の身体を背徳的に締め上げた。
　女性特有のしなやかさを持つモデルのように長い四肢にはエナメル質な黒のロンググローブとニーソックが重ねられ、その上に無機質な金属によって生み出された白銀色の手甲と脚甲を纏っている。鎧を連想させるそれらの装備は少女が戦士であるというイメージを強く印象づけ、力強さと神聖さの象徴となっていた。
　一方でボディ部分に重ねられるアウタースーツは女性らしさをより強調するデザインとなっている。
　インナー生地が吸い付くＤカップの美巨乳はチューブトップ型のスーツが巻き付くことで窮屈そうに押し込められ、少女の持つ女性的シンボルの豊満さと柔らかさを見る者に伝える。なにかの拍子にスーツが弾け飛んでしまいそうなバストは大きさだけでなく形も美しく、ツンと上向いているラインが少女戦士の意思の強さを表しているようだった。
　豊満な乳房とは対照的にウエストは細く括れ、無駄な脂肪など一切ないアスリートのように鍛え上げられていた。極薄のインナー越しに見えるお臍は縦長に伸び、お腹が引き締まっていることで、細いのに弱々しさを感じさせず、むしろ大胆な色香を醸し出している。
　魅力的な腰つきから視線を下げると、バストと同じくらい豊かに成長したヒップの肉感が目に入る。瑞々しい桃を思わせる弾けんばかりの美尻にもまたインナースーツが貼り付き、お尻の谷間や股間の割れ目にすら食い込んで、かなり際どい姿になっていた。
　そんな下半身に纏うのは黒のショーツただ１枚。インナーと違いショーツは透けていないため性器やアナルといった恥ずかしい部位こそ隠せてはいるが、布面積自体は小さくバスト同様に彼女の官能的魅力を推し出している。
　少し間違えば、扇情的な雰囲気を持ってしまう少女のコスチューム。しかし、その姿が決していやらしくならないのは全身を駆け巡る聖なるエネルギーの奔流があるからだろうか。
　少女の胸元では蒼い結晶体が輝いている。そのクリスタルは「聖結晶」と呼ばれ、適合者である少女の心に反応して無限のエネルギーを生み出す神秘の塊だ。
　溢れ出す力が少女戦士の体に蒼いラインを浮かび上がらせ破邪の力を与えた。光があれば影があるように、闇が蔓延るところにもまた対となる光は生まれる。
　不屈の闘志を武器にたったひとりで科学都市の悪と戦う正義の変身ヒロイン、それが「聖結晶姫ミツキ」であった。
「ぐ、ぬぅ……ひ、怯むな！　いくら聖結晶姫といえど、ダメージは残っているはずだ。数で押せばいけるぞ！」
　ミツキの復活に気圧される男達だったが、彼らも退くことはできない。肉体強

化の麻薬を使い、筋肉隆々となった男達は再びミツキを犯そうと雪崩のように押し寄せる。
　確かにダメージが無いわけではない。聖結晶の力で復活こそ果たしたものの、コンディションはベストにほど遠く、投与されていた媚薬の影響もあって、身体の疼きが治まっていない。
（それでも、私はもう負けるわけにはいかないわ！）
「ガントレット！　モードセイバー！」
　迫りくる敵を迎え撃つため、光刃を右腕の手甲へと形成する聖結晶姫。正面から向かってくる敵を一刀両断すると背後から襲い掛かる大男には回し蹴りを叩きこみ、続く攻撃にはクロスカウンターを決めて、次々に敵を撃破していった。
　猛攻を前に呼吸は乱れていくが、歯を食いしばって敵を蹴り倒す。返しの一撃で別の男を切り倒し、負けるものかと自身を鼓舞し、優雅な舞いのごとき立ち回りで劣勢を覆した。
　そして、正義の一撃は遂に組織のボスをも討ち破り、片腕を切り落とすという重症を負わせて死闘の舞台に幕を下ろしたのだった。
　しかし、ひとつの終わりは新たな始まりを意味する。
　決して折れない心の強さ。それは聖結晶姫ミツキだけの武器ではないのだから。

◇

「はぁ、はぁ、はぁ……くぅ……また、あの夢……なんて、忌々しい……」
　聖結晶の刃が振り降ろされ、宙を舞う片腕と鮮血が噴き出す悪夢を見たのはこれで何回目だろうか。
　ミツキによって切り落とされた右腕の傷口を握り込むと、悔しさと恨みで指先が震える。ミツキに敗北し、組織を壊滅させられた屈辱を忘れた日は無い。むしろ、時間が経てば経つほど、その憎悪は増すばかりだった。
　かつてミツキを苦しめた麻薬組織の美魔女こと朱麗蘭（ジュウレイラン）はベッドから上体を起こし、紫色の艶髪を掻き上げる。
　悪夢にうなされていたせいか、裸身を包むタオルケットは全身から滲んだ汗で貼り付き、起伏に富んだ麗蘭のボディラインを浮かび上がらせていた。武術を得意とする美魔女の身体は成熟した大人の魅力を備えつつも鍛え上げられており、獲物を狙う雌豹のような野生を秘めている。
　左目下の泣き黒子に加え、イヤリングと赤いルージュの組み合わせは危険な女の色香を強め、ただそこにいるだけで男を誘惑するフェロモンを纏う美女であった。

麗蘭本人も自身の美貌には相当の自信と誇りを持っており、科学都市の覇者となる器として相応しい存在だと思っている。だからこそ、ミツキによって奪われた右腕をなによりの汚点と感じているのもまた事実。今回の悪夢は特に鮮烈だったのか、敗北の屈辱が甦り悔し気に爪を噛んでいる。
（フッ……まぁ、いいわ。あの失敗があったからこそ、結果的に私はより強くなれた。なにより、あの生意気な小娘にこの屈辱を何倍にもして返せる楽しみが増えたんですもの。逆にお礼を言いたいくらいだわ）
ベッドから起き上がった麗蘭はテーブルの上にあるアタッシュケースを開け、野望を秘めた瞳をギラギラと輝かせる。
「遂に完成した、対聖結晶姫用の最終兵器。これさえあれば、私の勝利は揺るぎないわ……さて、まずは小娘が罠にかかる間抜けな姿を楽しませてもらおうかしら」
麗蘭が室内に設置された巨大モニターのスイッチを入れると、熱気溢れる観客達に囲まれたリングが映し出された。今まさに試合が始まろうとする闘技場を眺め、イベントの主催者である美魔女はほくそ笑む。
屈辱の敗北を糧とし、新たな力を得た巨悪の魔の手がミツキに迫る。
聖結晶姫の知らぬ内に美魔女による淫虐の逆襲が始まろうとしていた。

◇

正方形のキャンバスマットの床と四方に張り巡らされたロープによって作られたリングの上に２人の格闘家が対峙していた。降り注ぐライトの光が主役である格闘家達に注目を集め、客席を埋める人々の熱気に満たされた会場は異様な雰囲気に包まれている。
リングの中央で睨み合う両者はお互い視線を外さず、自分の勝ちを疑わない自信に満ち溢れていた。
片や不敗のチャンピオンとして紹介されたのはスキンヘッドの大男。黒光りする褐色の肌と盛り上がった筋肉の組み合わせは力強さの象徴であり、手足のサポーターとボクサーパンツのみというコスチュームからも、己の肉体美をアピールしたい心情が汲み取れる。
試合前のオッズを見ても、チャンピオンである男の優勢が示されており、実力と人気を誇ったパワーファイターであることが窺えた。
だが、人気という意味では挑戦者である少女の方が勝っていると言っていいかもしれない。１ヶ月ほど前にこの地下闘技場へ突如現れたかと思うと破竹の快進撃を続け、最短記録でチャンピオンへの挑戦権を得た強者だ。
圧倒的パワーで相手をねじ伏せるチャンピオンとは対照的なスピードとカウン

ターに特化した挑戦者。その凛然とした美しさでファンを惹きつけ、地下闘技場のアイドル的存在となっていたのは、謎の仮面美少女ファイター、マスク・ド・ミツキだった。
　その正体は素性を隠し、悪を滅ぼすために潜入した聖結晶姫ミツキこと蒼樹美月に他ならない。
　この闘技場の利益が違法なドーピングの開発資金に使われていることを突き止めたミツキは黒幕を潰すべく調査を行なっていた。黒幕は非常に用心深く、ミツキの諜報能力を持ってしても、未だ名前さえ判明していない状況。
　そんな手がかりがほとんど無い中、黒幕と唯一接触できる可能性があるのが今回のタイトルマッチだ。チャンピオンは闘技場のオーナーである黒幕に謁見する権利を与えられるらしく、ミツキはそのチャンスを活かして黒幕を潰す算段を立てていた。
（やっとここまで辿りついたわね。チャンピオンと聞いてどれほどの男かと思ったけれど、今まで相手にしてきた改造人間や怪人らと比べれば、大したことはなさそうだわ）
　女性として見れば美月は長身の部類に入る。それでもチャンピオンの男は美月よりも頭ひとつ分大きく、観客達からは美女と野獣の対峙といった構図を連想されていた。
　スピードはあるようだが、あの細腕では攻撃が通じるとは思えない。鍛えてはいるようだが、あんな華奢な身体ではすぐにねじ伏せられてしまうだろう。
　客席で囁かれる声は美月の劣勢を予想し、同時にアイドル的存在である美少女ファイターが初の敗北をむかえる瞬間を心待ちにするゲスな雰囲気が漂っている。
　そしてそれはチャンピオンの男とて同じ考えだった。
「へへっ、今回はツイてるな。こんな小娘を叩きのめすだけでいいのかよ。折角だからたっぷりと可愛がってやるよ」
　邪な感情に満ちた視線は美月の身体を舐め回すように見詰め、これから楽しめるであろう美体を前に舌を舐めずった。
　正体を隠すため、美月は青と白を基調としたアイマスク型の仮面をつけている。後頭部からは変身前の象徴である黒髪がポニーテールに纏め上げられて飛び出し、美少女格闘家のスポーティーなイメージを強くしてした。
　抜群のプロポーションを誇る美ボディにはマスクと同じカラーのスポーツブラとショーツ型のコスチューム。身体にフィットしたウェアは美月の持つ豊満バストや瑞々しいヒップを締めつけ、肉感と柔らかさをより魅力的に見せている。デザインがセパレートタイプであるためお腹が出ており、引き締まった腹筋が指抜き型ロンググローブや太股半ばまで覆うブーツとマッチすることで、ただ美しい

だけではない強さを少女戦士に宿らせた。
　チャンピオンに限らず、男が見れば垂涎もののグラマラスボディは確かについ視線を吸い寄せられてしまう。だが、その可憐な見た目に反し溢れる力は本物。変身前でも聖結晶の加護を受けている美月は下手な格闘家よりも遥かに強い。加えて、数多の悪を相手にしてきた経験の豊富さは圧倒的なテクニックの高さに繋がり、ここまで相手を寄せ付けない圧勝を重ねてきたのだ。
「あら？　ツイてないの間違いじゃないかしら。悪いけどあなたの相手に時間を割く気はないの。すぐに叩き潰してあげるわ」
「ハッ、生意気な女だな！　嬲り甲斐があるぜ！」
「ふん……弱い犬ほどよく吠えるというけれど、まさにその通りね」
　睨み合う両者のボルテージが挑発を繰り返すごとに上がっていき、熱気は会場にも伝播する。今回の試合形式は時間無制限の１本勝負。ＫＯまたはギブアップで勝負が決まる過酷かつシンプルなものだ。
　レフリーから試合のルールが説明されると両者は頷き、あとは開始のゴングを待つだけとなった。１度だけ大きく息を吐いた美月は集中力を高め、試合に勝利する自分の姿を思い描く。美月にとって、このタイトル戦はゴールではなく、目的達成のための通過点にすぎない。
　試合後、黒幕と接触した際すぐに対処できるよう体力を残しておく必要もある。観客が盛り上がっているところ悪いが、すぐに勝負をつけるつもりだ。宣言通りすぐに叩き潰そうと拳を力強く握り締めた。
「それでは最後にボディチェックを行ないます。まずはチャンピオンから」
（……えっ!?　なに……ボディ、チェック？）
　だが、せっかく高めた美月の集中力に水を差すように、レフリーが２人の間に割って入った。
　いつもならばルール説明が終われば各コーナーに分かれ、ゴングと共に試合を開始する。だが、今回に限っては、なぜか審判によるボディチェックが入り、チャンピオンの男は言われるまま手を上げ、凶器等を忍ばせていない証明をした。
「チャンピオン、オーケーです。では、次に挑戦者……ほら、早く手を上げて」
「えっ……ええ、わかったわ……」
　チャンピオンがボディチェックを受けたのならば美月も受けないわけにはいかない。違和感を覚えながらも、なにも隠していないとアピールするように両手を上げレフリーのチェックを受ける。
　レフリーのゴツゴツとした手が美月の脇腹を撫で、お腹を摩る。薄っすらと浮かぶ腹筋の起伏を確かめるように掌が何度も往復し、指先が縦長に伸びるお臍の淵をなぞった。
　じっとりと汗ばんでいるレフリーの掌が妙に肌に吸い付いてくる。まるで巨大

なナメクジが這いずっているかのような感触に不快感を覚えた美月は僅かに細眉を歪ませ、早く終われと無言のままボディチェックを受け続けた。
（ちょ、ちょっと！　そんなところ、触らなくたってなにも無いってわかるでしょ！）
　鍛えた筋肉の上に程良いバランスで脂肪の乗った太股が軽く揉まれる。レフリーの指を沈み込ませる柔らかさを持ちつつも、生意気に押し返す弾力を併せ持つ腿肉は美月の強気が宿っているかのようだ。
　掌が円を描いて腿肌を撫で、そのまま内側に滑り込んでくる。くすぐったいようなゾクゾクとした感覚から僅かに声を漏らした美月は肩を弾ませ、言葉では上手く言い表せない恥ずかしさに襲われた。
「んッ……ふぅ……ハァ……」
（さっきからずっと、太股ばかり触って……ねちっこくて、まるで痴漢されているみたいじゃない……）
　執拗に触れられる太股が徐々に熱を帯び始め、美月の頬が薄っすらと桃色に染まっていく。元々、人前に立つのが苦手で注目されることに慣れていない美月にとって、リングの上で観客の視線を集めるのはなんとなく気後れする部分があった。これまでは黒幕に近づくため仕方がないと割り切っていたが、衆人環視の中辱められている気分になると心を乱されてしまう。
「ふッ、あン!?、この、どこ触ってるのよ！」
　太股を離れたと思った手がお尻を鷲掴みにすると、さすがに戸惑いを抑えきれない。ショーツ型のコスチュームからはみ出しているムチムチのヒップラインが歪むほど指先が食い込み、丹念に揉みほぐされると身体を捩って審判の腕を振り解く美月。乙女の貞操観念がお尻を守ることに意識を向けさせ、両手を美尻に添えた美月は怒りを宿した目でレフリーを睨み付けた。
「なんだぁ、ボディチェックを拒んでどういうつもりだ！　おい、レフリー！　その女、ウェアの中に何か隠してるんじゃないのか。脱がして確かめろよ！」
「そうだな、確かに様子がおかしい。マスク・ド・ミツキ、コスチュームの中を確認させてもらう」
「なっ!?　馬鹿なこと言わないで！　そんなことできるわけないでしょ！」
　チャンピオンの男の指摘を受けたレフリーは美月のパンツの中を確認するのが当然だと主張する。一方の美月は変態的な命令を断固拒否し、レフリーが身体に触れようとする掌を払い除けた。
「ボディチェックを拒否するのか。ならば不正の可能性があるということで、この試合はマスク・ド・ミツキの反則負けとなるがいいな？」
「ちょ、ちょっと待って……くっ！　わかったわよ……パンツの下を見せるわ。ただし、自分で脱ぐわ……それで、いいでしょ！」

理不尽な要求をされているのはわかっている。普段の美月ならばこんな変態的要求に従うことなど絶対に無い。だが、こんなことで反則負けにされてしまっては、これまで積み重ねてきた苦労が無駄になってしまう。それだけは避けなければと思う美月は屈辱で身体を震わせながら、ゆっくりとショーツの淵に指を挿し入れた。
芸術的な括れを持つ腰を曲げ、やや前屈みになってアンダーウェアを下げていく美月。まるで観客前でパンツを脱ぐ痴女のような格好になってしまい、恥じらいからマスクの下の顔がドンドン熱くなっていくのがわかる。
「おい、マスク・ド・ミツキが急に脱ぎ出したぞ。なんだ、ストリップショーでも始まるのか」
「おおおっ、白くて綺麗な肌してるな！　プリプリのお尻が半分見えてるぞ！」
（そんな、マジマジと見ないでよ……こんな、屈辱だわ……）
フィット感の強いパンツ生地はズリ下げても身体に貼り付き続け、豊臀に食い込むことで美月の肉付きの良さをアピールしてしまう。試合開始前に突然始まった美少女ファイターのサービスを前に、観客達はいやらしい視線と声を浴びせ純真少女の心を嬲っていった。
美月のヒップラインをなぞりながら下がっていったショーツが尻タブの下に入り込み、プルプルと揺れながら桃尻がこぼれ落ちる。美月のコーナー側からは可愛いお尻が丸見えになってしまい、肛門だけは隠そうと谷間に手の甲添える仕草が余計に会場のボルテージを上げてしまった。
お尻は丸見えだが、性器を晒すことまでは流石にできず、必死に掴んだ前方の布地と手で陰部だけは懸命に隠す美月。聖結晶をその身に宿したことによる体質の変化なのか、男好きそうな豊満ボディを持ちながらも、産毛の１本すら生えていないパイパンがバレてしまい、恥ずかしさで手が僅かに震えている。
「ほ、ほら！　これでいいでしょ……さっさと確認しなさいよ！」
羞恥心と屈辱を隠すため、声を荒げてチェックを促す。レフリーは美月の前にしゃがみこむと、今にも秘裂が見えてしまいそうな股間をマジマジと見詰め、そのまま後ろに回りヒップを凝視した。
レフリーが顔を近づけたせいで鼻息が当たり、反射的に美月の身体がビクリと震える。見られている恥ずかしさで身体が火照り、薄っすらと汗が滲む尻肉。ほんのりの紅潮した柔肌の影響で、パンツのゴム紐の上に乗った美尻は食べ頃の桃のような艶を持っていた。
「……オーケーだ。アンダーウェアの中に何も隠していないことを確認した」
「当たり前よ！　私が不正なんてするわけないでしょ！」
時間にすれば僅か数秒の凝視が美月にはもっと長く感じられただろう。苛立ちを露わにしながらすぐにショーツを引き上げた美月は鋭い視線でレフリーを睨み

付けた。
　これでやっと試合が始められる。マグマのように湧き上がる怒りをチャンピオンの男にぶつけてやろうと、気持ちが昂ぶっていく。
「では、次はトップスだ……ん？　何を驚いた顔をしている。さっさと捲り上げろ」
　チェックが終わったかと思った矢先、今度はスポブラの中の確認を強要される。お尻を見るため背後にしたレフリーが脇の下から腕を入れ、美月の両胸を掴みかかった。
「はぅ、くぅ……ふゥ……急に、触らないで……脱ぐわ、自分で脱ぐから、ンッぅぅ!?」
　まるで美月が油断するのを待っていたかのように、レフリーは美乳を大胆に揉み込む。Ｄカップを誇る巨乳がスポーツブラの中で水風船のように弾み、ゾクゾクとした感覚が乳肌の上を走っていった。
　円を描いて這いずる掌が先端に向かうと、探り当てられてしまった乳首を豊乳の中に押し込まれ、女性特有のラインを描く撫肩がビクンと弾む。乳頭を摘まれ指先で弄ばれると、甘えた声が漏れてしまいそうになり、口を手で塞いで必死に喘ぎを堪えた。
　科学都市に蔓延る数多の悪を滅ぼしてきた美月だが、決して無敗というわけではない。過去には囚われの身となってしまい、過酷な調教や陵辱を受け続けた時もあった。その後遺症もあり、美月の身体は性的な刺激にとても敏感になってしまっている。中でも乳首は特に感じやすい場所のひとつであり、コスチュームの上から刺激されただけでも感じてしまう弱点だった。
「ふぅ、ッ、ぁん……ふぁっ、や、やめ……」
　背中を丸め、身体を捩って逃れようとしても、乳首を転がされると力が抜けてしまう。充血していく乳突起は徐々に硬くなっていき、恥じらう乙女心を嘲笑うかのように勃起し始めていた。
　腰をくねらせ、膝の頭を擦りつけて身悶える美月。顔を上げると、美少女格闘家の痴態をいやしい目で眺めるチャンピオンが目に入り、美月の中の怒りメーターが上昇していく。
「くっ、ふぅぅぅ……だ、だから……脱ぐって言ってるでしょ！」
　普段クールな美月にしては珍しい感情を表に出した怒声が響く。力任せにレフリーを振り解いた美月はやや呼吸を乱しながら距離を置き、それ以上近づくなと目尻を吊り上げて威嚇した。
「ハハハッ！　そりゃあ、いいな！　さっさと脱いで、その大きなおっぱい見せてくれよ」
「ッ!?　ぅ……あなたは黙ってなさい……ぅぅ……」

　美月の脱ぐ宣言を受け、はやし立てるチャンピオン。まるで、チャンピオンに言われて脱ぐようなシチュエーションになってしまったことが美月のプライドを傷つけ、恥じらいの気持ちが大きくなってしまう。
　こういう時は態度に出すと相手を喜ばせるだけだと自分に言い聞かせ、顔を背けてレフリーもチャンピオンも見ないようにする美月。恥ずかしいのを隠そうとしているその仕草が逆に観客達の嗜虐心を刺激してしまい、客席からの嘲笑の声が大きくなっていく。
「おいおい、今度はおっぱい見せてくれるのかよ！　今日のマスク・ド・ミツキはサービスしてくれるぜ」
「いつも胸揺らしながら試合をしていたからいい乳してるとは思ったけど、生乳はまた違ったエロさがあるな」
（くぅぅ……男っていうのは、どうしてこうもいやらしい事ばかり考えるのよ……レフリーが変なこと言わなければ、絶対に見せたりしないのに……）
　悔しさから下唇を噛みしめた美月はゆっくりと胸生地をめくり上げる。ボリュームのある乳房はスポブラが引っかかって上側に引きずり上げられ、下胸の付け根が見えてしまった。密着性のあるコスチュームに締め上げられることで窮屈そうな谷間ができあがり、ほんのりと朱色に染まる下乳が外気に晒される。
「言われた通りにしたわよ……早く確認しなさい」
　乳首が見えないギリギリのラインまで捲り上げられたスポーツブラ。客席から邪な歓声が上がると、美月は自身の痴態を意識させられ、自然と息が荒くなっていた。
　だが、レフリーは確認をせず、まだ半分隠れていると首を横に振る。今でも十分過ぎるほど恥ずかしいというのに、これ以上を求めるというのか。
　乙女のプライドと正義の味方としての使命感が葛藤を起こすが、反則負けをチラつかされると従うしかなくなってしまう。
　片手をコスチュームの中に入れ、可能な限り胸を隠してトップを引き上げていく美月。上乳を撫でながら進んでいく布地が頂点を過ぎて解放されると、一気に胸上に捲れ上がってしまい、Ｄカップ美巨乳がゴム毬のように弾けてこぼれ落ちた。
「ゃんっ……くぅ、ぅぅ……」
　予想外のアクシデントから悲鳴を上げそうになってしまうも、なんとか声を飲み込む。目を泳がせながら手ブラを作った美月は乳首が見えないよう必死に胸を隠す。掌に当たる硬い突起が勃起してしまった乳首だとわかると、こんな状況でも感じてしまう自分の身体が恥ずかしくなってしまい、いつもまで経っても気持ちが落ち着かない。
「今度こそいいでしょ！　ほら、確認しなさいよ！」

「おー、ちゃんと見てやってるぞ。小娘のくせして、デカイ乳してるな。折角そんなエロい身体してるんだ、格闘家なんかやめて風俗嬢にでもなった方がよっぽど稼げるぞ」
「あなたには言ってないわ！　むしろ、見ないで！」
　イチイチ突っかかってくるチャンピオンの言葉がクール美少女をかき乱し、知らず知らずの内に美月はペースを狂わされていた。
　冷静にならなければいけないとわかっているが、間髪入れずにレフリーが顔を近づけ美月の艶めかしい胸元を凝視して羞恥心を煽ってくる。
　ボディチェックというよりもこれは明らかな視姦だ。触ってこそこないが、下乳から上乳までも舐め回すように見詰められ、若く瑞々しい身体に悪寒が走る。胸を隠す手が緊張し、唾をゴクリと飲み込む喉が波打った。
「ふむ、これだけ大きな胸だと谷間に何か挟めそうだな。念のため、谷間を開いて見せるんだ」
（そんなところに隠すわけないでしょ！　くっ、この……変態ども……）
　心の中で毒づきながら、美月は言われた通り胸を左右に押し開く。先程まで密着していたせいで蒸れていた谷間を汗粒が流れ落ち、僅かに香る美少女の匂い。とにかく視線を気にしないようにしても、鼻息が当たると無視できず、美月はプルプルと肩を震わせた。
「よし、オーケーだ」
　今度こそレフリーのボディチェックをクリアすると、すぐにスポブラを引き下げる美月。すると、胸の先っぽを擦った裏地の刺激が痺れとなって乳房に広がり、媚びるような可愛い声が少しだけ出てしまった。
（あっ、乳首が勃ったままになっちゃってる……情けないわ、こんな少し弄られてくらいで……感じちゃうなんて……）
　常に気丈で凛々しい美月だが、その清らかな心に反していやらしく開発されてしまった身体は潜在的ではあるがマゾヒスティックな一面を持っている。ただでさせ弱い乳首を不意打で弄られ、感じてしまっていることを意識させられてしまったせいで、乳突起が勃起したまま戻らない。恥じらえば恥じらうほど充血は増し、コスチュームの上からでもわかるほどのポッチがはっきりと浮かび上がってしまっていた。
　できることならば、昂ぶってしまった身体を静める時間が欲しい。だが、美月の調子を崩すだけのボディチェックが終わると、コーナーに戻るよう指示されてしまい、すぐに試合が始まる流れとなった。
（この試合……何かがおかしいわ。明らかな悪意を感じる……けれど、こんな卑怯な手で私は負けたりなんてしない。どんな思惑があるにせよ、まとめて叩き潰すだけよ！）

予想していなかった出来事により、美月のコンディションは確かに悪くなっている。しかし、悪に対する不屈の闘志は逆に気力を高め、ボディチェック前よりも美少女格闘家を滾らせていた。
カーーーーン！
そして、試合開始を告げるゴングが遂に鳴る。
先程までの美月の痴態を見て、チャンピオンの男は興奮していた。目の前の獲物は顔立ちも身体つきも文句のつけようがない一級品。しかも見るからに気が強そうで、自分が負けるなど微塵も考えていない自信も感じられる。
チャンピオンとして君臨してきた男は今までも美月のような美女ファイター達を返り討ちにしてきた。最初こそ威勢が良かったものの、徐々に劣勢に追い込まれ、最後には泣きながら惨めに敗北を認める。
美月に対してもこれまでと同じように、女として生まれてきたことを後悔するほどの恥辱を味わわせてやろうと、期待に胸躍らせ唇を舐めずった。
「随分とのんびりしてるのね……もう、試合は始まってるわよ！」
「なっ!?　がはっ……！」
電光石火とはまさにこのことだろう。悠然と歩み寄るチャンピオンに対し、キャンバスを力強く蹴った美月は弾丸のごとき速さで懐に入り込む。神速のハンドスピードから繰り出されるパンチが筋肉の鎧に守られたボディに叩きこまれると、目を見開いた男は後退り尻餅をつかされた。
少女の細腕から放たれたとは思えない強烈な拳に呆気をとられ、尻餅をついたまま美月を見上げるチャンピオン。
「あら、もしかしてもう終わりかしら？　私を可愛がってくれるんじゃなかったの」
「グッ、この……い、今のはマグレだ！　１発当てたくらいで調子に乗るな！」
尻餅をついたチャンピオンを見下ろす美月。凛然としたその姿は勝者が敗者を見下しているような構図となり、王者のプライドを傷つけていく。
チャンピオンはすぐに立ち上がってファイティングポーズをとり、ダメージが無いことをレフリーにアピールした。その見た目からもわかるように、男はかなりタフなようで一撃で仕留められるほど弱くはない。加えて、完璧に見えた美月の奇襲が実は本来の威力でないことも影響していた。
（くっ……胸が擦れて、上手く力が入らなかったわ……試合前に余計なことをしてくれたわね）
いつもならば気にならないはずの裏地の擦れが、ボディチェックの影響のせいで今日はやけに感じてしまう。敏感になってしまっている乳首が生み出す淫感によって、足腰に力が入り切らず、美月としては不本意な一撃になってしまっていた。

とはいえ、実力差は明らかだ。多少タフであるのならば、倒れるまで打ち続けるのみと、気合を入れ直した武闘少女は戦女神のごときオーラを纏い凛と構えをとった。
身長差からくるリーチの差を活かし、今度はチャンピオンの攻撃が先に放たれる。まともに当たれば華奢な女性など一撃で叩きのめされてしまうであろう豪腕が風切り音を響かせた。
だが、涼しい顔をしてパンチを捌いた美月は側面に回り込んで脇腹を突き上げるボディブローを決める。顔をしかめたチャンピオンが苦し紛れに攻撃を返すと、それも難なくいなし、今度は逆のボディへ拳を叩き込んだ。
堪らずチャンピオンが後退すると、即座に追って逃がさない美月。左のジャブで男の鼻先を叩いて距離を測り、続く右のストレートで頬を強打する。綺麗に打ち抜かれた拳に合わせ、艶やかな黒髪ポニーテールが波打ち、飛び散る汗がライトの光を浴びてキラキラと輝いた。
「ン、ぅ……くふぅ……ゥ……」
一見すると完璧に見えるコンビネーション。しかし、パンチを打つたびに激しく揺れる乳房は充血した先っぽから電気を流したような痺れを生み、擦れた分だけ乳首が鋭敏になっていく。僅かに踏み込みが足らず、渾身のストレートパンチは先程と同じく思っていたよりも威力が落ちてしまっていた。
不十分な攻撃ではチャンピオンを倒しきることができず、反撃の連打が美月を襲う。軽やかなステップを刻み、踊るようにパンチをかいくぐるが、胸がジンジンとムズ痒さを増し動きが鈍っていった。
（なにか、おかしいわ……こんな時に、身体が熱くなって……くっ!?）
美少女ファイターの武器であるスピードの陰りを見逃さず、勢いづくチャンピオン。辛うじて猛攻を防いでいるものの、真正面からパワーをぶつけ合っては美月にとって分が悪く、リング中央からコーナーへと徐々に押し込まれていく。
美月は知らない。この試合は公平さなどなく、最初から彼女を罠に嵌めるために用意されたリングであるということを。
レフリーのボディチェックがそうであったように、美月は既に敵の術中にある。いつもと同じだと思っていたリングコスチュームは内側に媚薬が塗り込まれており、汗によって少しずつ美月の身体を蝕んでいたのだ。
ボディチェックで身体のエッチなスイッチを入れられてしまい、リングを照らすライトの熱が室内の温度を上げる。防戦となり促される発汗によって、媚薬はドンドン肌に吸収され性責めに弱い美ボディを脆くしていった。
「うぅぅ……ふぅ、ッ……くふ、ゥ……ンン……！」
そうとは知らず、僅かに胸が擦れただけで感じてしまうことを恥じらう美月は女としてのプライドを保とうと必死に耐えていた。噴き出す汗は露わになってい

るお腹や太股にも浮かび、肌理細かい肌に艶めかしい光沢感を与える。
　媚薬の塗布はスポーツブラだけではなく、当然パンツにも施されており、下腹部が疼き出すのを止められなくなっていった。
（胸だけじゃない……アソコまで、こんなに感じて……まさか、ボディチェックの時になにかされたんじゃ……あっ!?）
　冷静に思考を回し、この試合そのものの違和感に気付き始めた美月だがタイミングとしては遅すぎた。感じてしまって身体が思うように動かず、足元がフラつくとチャンピオンの攻撃を捌ききれなくなり、苦し紛れに上体を逸らして回避する。
　フック気味のパンチが僅かに身体を掠め、直撃を間逃れた美月。しかし、この僅かに掠めた場所がいけなかった。よりにもよって、乳首を擦られてしまったのだ。
　試合前から刺激を受け、更に媚薬で十分に濡らされてしまった突起は今の美月にとって致命的な弱点と化している。駆け抜ける刺激に耐え切れず、喘ぎ声を漏らした美月は両腕で胸を庇ってしまっていた。
「やっと足が止まったな！　くらえ！」
「あっ、くぅ……きゃあああ！」
　体格差を活かしたタックルをモロにくらってしまい、コーナーポストに押し付けられてしまう美少女ファイター。巨体とコーナーで挟み込まれる形となった美月は苦し気に咽返り、なんとか脱出しようと膝蹴りを叩きこむ。
　分厚い胸板に膝が入ると巨漢のチャンピオンも流石に揺れるが、拘束を解くまでには至らない。それでもまったく効いていないわけではなく、再度膝蹴りを打ち込むとする美月。
　だが、それよりも早くチャンピオンは美月の胸に手を伸ばすと、コスチュームの上からＤカップ美巨乳を握り込んだ。
「うっ、あぁぁ！　ちょっと、どこ触ってるのよ！　こんなの反則じゃ、はぅん！」
　とっくに昂ぶってしまっている胸を揉まれてしまうと、力が入らなくなってしまい折角の膝蹴りも弱々しく終わってしまう。レフリーに反則だとアピールしても取り合ってもらえず、モタモタしている間に美乳が弄ばれていく。
　媚薬を吸ってしまった乳肌は乱暴な愛撫でさえ快感に変換してしまい、ギュウギュウと搾り上げられるだけで乳芯が熱くなってしまう。男を引き剥がそうと両腕で押してもパワー勝負では敵わず、逆に惨めな姿を観客に晒してしまった。
「少しはやるようだったが、所詮は女だな。捕まえちまえばこっちのもんだ」
　男の掌に収まらない巨乳がゴム毬のように弾み、強く握り込まれて指の間から乳球がムニュリとはみ出す。ひと揉みされるごとに昂ぶる淫乳は美月を火照ら

せ、甘えた声が出そうになっていく。
　こんな状況で感じているなんてバレたくない。初心な乙女心が喘ぐことを拒み、唇を引き締める美月は必死の形相で堪えることを選ぶ。
　しかし、責め先が乳房から乳首に変わると、それまでとは比べ物にならない快感が押し寄せ、美月の頑張りを無駄にしようとした。
「試合前からあんだけ硬くしてたんだ。やっぱり乳首が相当弱いみたいだな」
「ンンンッ……くぅ……ッ……はぅん！」
　グミのような弾力を持つ乳頭をコリコリと摘ままれると、桃色の唇が戦慄いてくぐもった悲鳴が漏れてしまう。乳輪との境目に爪を立てられ、何度もなぞられてしまうと腰に力が入らなくなり、膝蹴りを放つどころか立っている余力さえ奪われていく。
　ガサツそうな太い指だというのに、チャンピオンの指使いは巧みであり、女を悦ばせるいじり方を熟知していた。コスチューム越しでもわかるほど起立してしまっている乳首は痺れるような快感を次々に生み出し、歯を食いしばる美月はプルプルと唇を震わせる。
　焦らすように先端を引っ掻かれ乳淫感が蓄積していく。眉をハの字に歪ませ、イヤイヤと頭を振る仕草は格闘家ではなく、犯されている無力な女の子のものだった。
「ふぅ……んッ……はぁ、はぁ……ふぅ!?　ひゃあああああ！」
　中途半端な愛撫による焦らしから一転して、乳腺を潰されるかと思うほどの強さで乳首に爪を立てられ、遂に美月の口から明確な喘ぎ声が漏れてしまった。
　１度声が出てしまうと、もう抑えが効かなくなってしまう。ダメだとわかっているのに甘い声を搾り出され、身体から力が抜けていってしまう美月。
　声のトーンの違いが弱い責め方を白状してしまい、チャンピオンに握り込まれた美乳はもはや玩具同然だった。
「どうやら摘ままれるのが苦手のようだな。ほれほら、もっと可愛い声聞かせるよ！」
「くっひぃ！　はぅ、ん……ひ、卑怯よ……アっ……さっきから、胸……ばか、り……アッ、アッ、アッ、アッ！」
　乳首を引っ張り上げるようにして摘ままれ、コリコリと捻じられると、美月の声色から明らかに余裕がなくなっていく。ギュッと目を閉じ、歯を食いしばろうとしても、緩急をつけた乳首責めを受けるとだらしなく口が開き、涎が一筋糸を引いて垂れ落ちてしまう。
　乳腺を通じて快楽が胸全体に広がっていき、手足が痺れを起こしていく。立ち続けるのが辛くて膝が笑い出し、チャンピオンを引き剥がそうとする腕もプルプルと震えるだけになってしまった。

　遂には押すことそのものができなくなり、チャンピオンの肩に添えられていた手が力無くずり落ちていく。指先が滑り落ちると、細くしなやかな美月の腕がダラリと垂れ、もう反撃の力が残っていないことを強く印象づけた。
　これまで無敗の快進撃を続けてきた美少女格闘家が遂に負ける。その瞬間を心待ちにしていたゲスな観客達から歓声が沸き上がり、チャンピオンも勝利を確信した。
（責めが弛んだ……今だわ！）
「ッ！　なッ!?」
　だからだろう。敗北寸前の美月がまさかまだ諦めていないとは思わなかった。力無く垂れたはずの両腕が鞭のようにしなり、力尽きたフリに騙された男の首に巻きつけられる。確かにパワー勝負では敵わない。執拗な愛撫によって昂ぶってしまった身体では得意のスピード勝負も挑めそうにはない。
　そんな中で美月が賭けたのは絞め技だった。勝ったと思った時こそ隙というのはできるものだ。その一瞬のチャンスを見逃さなかった美月は細腕でチャンピオンの喉を圧迫し、背中を後ろに反らせた。
（よし、入ったわ！　このまま……落ちなさい！）
　暴れるチャンピオンは美月の胸に爪が食い込むほどの強さでバストを握り込んだ。乳房がもげてしまうかと思うほどの痛みに顔をしかめる美月であったが、それでも締めを弛めることはなく、更に背中を反らせて拘束を強める。
　見る見るうちに顔が真っ赤になっていくチャンピオンは悶え、足がもつれて倒れ込んだ。乳首責めで足腰の力が入らない美月もまた巨漢の男を支えることはできず、もつれるように倒れてしまったが、締め上げだけは弛めず首をへし折らんばかりの勢いで力を込め続ける。
　足をバタつかせ、抵抗らしい抵抗もできなくなって力が抜けていくチャンピオンの巨躯。劣勢をひっくり返し、美月がチャンピオンを締め落とすのはもはや時間の問題だった。
　あと数秒この状態を維持できれば美少女ファイターの鮮やかな逆転勝ちが達成される。美月を玩具扱いしていたチャンピオンにもはやこの場をひっくり返す策は無く、卑怯な手を使ったにも関わらず敗北するという無様な姿を晒すだろう。
　ただしそれは、これが１対１の勝負であった場合。試合前のボディチェックの時点で気付くべくだったのだ。このリングの上にはレフリーというもうひとりの敵がいるということを。
「ひゃっ！　えっ……あン、ッ!?」
（なっ、なに……今、レフリーが触って……あうぅん！）
　今にも締め落とされそうなチャンピオンの状態をチェックするフリをして、レフリーの手が美月の股間に触れる。コスチューム越しとはいえ秘裂に指を沈み込

まされると、完全に予想外の愛撫によって浅ましい悲鳴を上げてしまった。
　力が抜けてしまい、締めが弛みそうになる。慌てて力を込めなそうとする美月であったが、レフリーは更に陰部をまさぐり鮮やかな逆転劇を妨害した。
「なっ、ちょっと、レフリーなにして……ひゃん、きゃああッ！」
　パンツの上から陰核を突かれ、下腹部を貫くような淫撃が走る。腕の力が抜けてしまうと、チャンピオンに拘束を振り解かれてしまい、美月はキャンバスの上を転がった。
　あと一歩で掴めそうだった勝利が掌からこぼれ落ちていく。だが、決まりかけていた絞め技のダメージはしっかりと残っており、タフなチャンピオンといえど咳き込んですぐには動けずにいた。
（まだよ！　さっきのダメージが残っている今ならまだ……えっ!?）
　すぐに起き上り追撃しようとする美月であったが、頭を何かに引っ張られ動けない。焦る切れ長の瞳に映ったのは美月のトレードマークとも言えるポニーテールを踏み付け妨害するレフリーの姿だった。
「こいつ……レフリー、足を退けて！　聞こえないの、退けなさい！」
　髪を踏まれる痛みに顔をしかめながら、激しく抗議する美月。女の命とも言える髪を踏まれただけでも屈辱だというのに、その上試合の妨害までされては声を荒げるなというのが無理な話だ。
　しかし、レフリーは美月の声を完全に無視して邪魔をし続ける。言葉では伝わらないと悟った美月は力づくでもレフリーを排除しようとした。
「残念だったなぁ〜〜、たまたま髪を踏まれるなんて運がなかったと思え！」
　ズドオォォォォォ！
「ガハッ！　うぶぅ、うっああぁァァァァ！」
　美月がレフリーに気を取られている間に体勢を立て直したチャンピオンの肘打ちが炸裂する。仰向けの体勢で無防備に晒されていた腹部へ杭を突き立てられたと錯覚するほどの衝撃が走り、キャンバスにめり込みそうな勢いでグラマラスボディがくの字に折れ曲がった。
　目を見開き、一瞬呼吸ができなくなった美月は形のいい唇をパクパクと開閉させる。普通ならば内臓が破裂していてもおかしくない危険な一撃だが、聖結晶の加護を受けている美月はなんとか死を間逃れた。とはいえダメージは甚大であり、痛みに耐え切れず青黒い痣のできたお腹を抱え、悲鳴を上げて身悶えた。
（ま、まずいわ……早く、体勢を立て……直さ……きゃあああああ！）
　起き上がることができず、這って距離を取ろうとするが、すかさずチャンピオンの蹴りが美月の背中を踏み潰す。潰れたカエルのような格好になってしまった美少女格闘家の身体に次々と落とされる王者の足裏。
　背中を踏まれると、キャンパスと身体に挟まれたＤカップバストが潰され、床

と擦れる乳首がこんな時でさえ快感を送り込んでくる。蹴られたお尻が柔らかさを伝えるようにプルプルと揺れ、コスチュームからはみ出した尻肉から汗粒が飛沫となって飛び散った。
　体勢を立て直すところか、動くこともままならなくなってしまった美月。先程勝負が決まったと思ったところで反撃を受けたチャンピオンも今回は慎重になり、念には念を入れて手や足まで踏み付けてくる。肩や膝が軋み、身体中の痛みが美月の自由を奪っていった。
「ぅぅ、あ……ぐっっはぁ！　ぅ、きゃあああ！　ハァ、ハァ……」
　弱々しくなっていく悲鳴を確認したチャンピオンは美月の背中に圧し掛かると、先程のお返しとばかりにチョークスリーパーでの失神を狙い、豪腕を細首に巻きつけた。
「チッ！　しぶといやつだ。だが、もうお前の負けは時間の問題なんだよ！　諦めろ！」
「ガっ、あぁぁ……ま、負け、ない……私は、絶対……ぐぅぅぅ、あきらめ、ない……アッ、あぁ……」
　散々痛めつけられながらも、腕と首の間に指を挟み込んだ美月はチョークスリーパーが決まるのを防いでいた。腕力でねじ伏せようと圧迫が強くなるも、歯を食いしばって必死に耐える武闘少女。どんな時でも諦めない不屈の闘志。これこそが、蒼樹美月の最大の武器だと主張するかのよう奮闘だった。
「おい、マスク・ド・ミツキ！　ギブアップか？　ギブアップするのか？」
　だが、いくら美月とはいえ、この劣勢で数の優位までとられてしまっては反撃できない。締め上げられる美月に対し、ギブアップの確認をするフリをしてしゃがみ込んだレフリーが無防備な股間へと手を伸ばした。
　足を閉じる余裕さえ既になく、クロッチ部分をズラされてしまった割れ目へ、レフリーの指が入り込む。
「へひゃぁぁあ！　や、やめっ、そんなとこ……あぁっ、アアアア！　卑怯、卑怯よぉぉぉ！」
　胸への愛撫の影響で湿っていた秘裂を割り開かれ、膣口で２本の指が暴れまわる。敏感な粘膜を掻き回され、絡み付く愛液が動きに合わせてクチュクチュと音を立て始めた。膣中で指を曲げられると堪らずに甘えた声が漏れ、爪先をピンと伸ばして突っ張る両足。掻き出すように指が往復するたび、身体の奥底に残しておいた体力まで引きずり出されているような感覚になり、身体に力が入らなくなってしまう。
（そんな、乱暴に掻き回さないで……そのやり方、ダメっ……感じちゃう、試合に負けそうなのに、気持ち良くなっちゃうからぁぁ～～）
　チャンピオンの締め技を防ぐため力もうとすると下腹に力が入ってしまい、挿

入された指を締めつけて余計に意識してしまう。汗以外の体液が股間から溢れ出し、快楽に耐え切れず尻タブがヒクヒクと疼き出してしまった。
　滲む愛液によってコスチュームに塗られていた媚薬が溶け出し、乙女の聖域はとっくに媚薬漬けになっている。こんな状況でも感じてしまうことを恥じらう初心な心がマゾヒスティックなボディには心地良くなってしまい、美月は淫感による負のループに落ちかけていた。
「ッッ！　ぅ、ひゃああンンン！　あン、やっ、そ、そこはぁぁぁ〜〜!?」
　ひときわ甲高い声を上げ、身体を震わせる美月。股間に雷を落とされたような衝撃を生み出したのは、クリトリスを摘ままれた瞬間だった。
　女神のような美しいプロポーションを誇る美月だが、そんな彼女でも自身の身体にコンプレックスがある。
　ひとつは赤ん坊のようにツルツルで産毛すら生えていないパイパン。もうひとつは平均よりも大きい淫核だった。
　色責めを受け続け、充血してしまった肉突起は包皮がめくれてピョコリと頭を出している。その大きさは小指の先ほどもあり、勃起時にはコスチューム越しでも位置がバレてしまうほどだ。
　女性にとって快楽を得るためだけに存在する部位であり、美月の場合過去の調教の影響もあって、悲しくなるほどに弱い性感帯だった。そんな場所を摘ままれては気丈でなどいられない。明らかに取り乱した声を上げてしまい、足をバタつかせて身悶えていく。
（ダメっ、ダメなの……今の状態で、そこまでいじられたら……感じるの、止まらなくなっちゃう……もう、試合どころじゃ……）
「ひゃあッ、ぅ、あぁ……ダメぇ、そこ、やめっ……アッ、アッ、アッ！」
　身体の反応を見れば、クリトリスが美月の急所であるのは明白だった。摘ままれただけでも喘ぎ声が抑えられないのに、爪を立てられたらもっと耐えられない。嬌声を発し、打ち上げられた魚のようにヒクつきが大きくなっていくグラマラスボディは汗だくになっており、ライトの光を受けて油を塗り込んだように照り光っていた。
　激しく摘まんだかと思えば、今度は指の腹で転がしてジワジワと焦らされる。絶妙の緩急の前に発情しきった女体はメロメロにされ、半開きの口からだらしんない涎がこぼれていく。もう力が入らず、このままではイカされてしまう。そんな敗北の予感が美月の脳裏をかすめてしまうも、不屈の闘志を持つ乙女は弱気を振り払って抗おうとした。
　だが、美月の本来の敵はレフリーではない。快感に耐えようとして意識が逸れた瞬間、首への注意が疎かになってしまった。
　グギイイィィィィ！

「ガハッ！　あぁ、ァ、し、しまっ!?　かはっ、ごほっ、おえぇ！」
　力の入らない手ではチョークスリーパーを防ぐことができなくなり、筋肉隆々の腕が美月の細首を締め上げる。ギリギリのところで保っていた勝負の天秤が傾くと、いくら歴戦の女戦士といえど巻き返すことができない。
　完全に決まってしまった絞め技によって気道が圧迫され、美月の唇が桃色から青に変色していく。爪先まで反り返った美脚が痙攣を起こし、震える指先はチャンピオンのグローブを引っ掻く程度の抵抗しかできなかった。
「アッ……ごほ、ッ……ぅ、ぁぁ……」
　呻き声が途切れ途切れになり、切れ長の瞳が上ずっていく。ビクン、と足が大きく跳ね上がったかと思うと、糸の切れた人形のように両腕がダラリと垂れた。
　ビクッ！　ビクビク……ビクンビクンビクン……ビクッ……
　決して諦めないと誓ったはずの瞳から光が消えた。消えてしまった。
　半開きのまま閉じられない口腔から涎と一緒に泡が噴き出し、呻き声さえ上がらなくなる。
　可愛らしい小さな舌がポロリとこぼれ落ち、凛々しかった女戦士の威厳が欠片も無い。
　ジュ……じゅわ……じょわぁぁぁ〜〜！
　更にヒクつく股間からアンモニア臭を漂わせる黄色の液体が漏れ出していく。言い訳などできないレベルで失禁してしまっていた。
　潜入捜査のためとはいえ、格闘家として上がったリングの上で、美月は締め落とされて失神してしまったのだ。
　カーン！　カーン！　カーン！
　試合終了を報せる鐘の音が響き渡り、無敗の美少女ファイター陥落の目撃者となった観客達から歓声が湧き上がる。誰も美月の敗北を気遣う者はおらず、この場には彼女の敵しかいなかったことを如実に示していた。
　ホールドを解かれても美月は細かな痙攣を繰り返すばかりで意識が戻らない。敗墜の少女戦士の両脇にレフリーの手が通され持ち上げられると、グッタリとした美体が羽交い絞めの格好で観客の前に晒される。
　スポーツブラ越しに浮かぶ勃起乳首を嘲笑う声が聞こえた。執拗に掻き回された秘部からは愛液が滴り落ち、内腿がヌラヌラと照り光っている。淡く変色したパンツはお漏らしの跡をしっかり浮かべ、無様としか言いようがなかった。
　あまりにもわかりやすい敗者の姿。プライドの高い女戦士にとって、意識が無いままでもこんな扱いを受けるのはさぞや屈辱であろう。
　しかし、美月を辱めてやりたいチャンピオンの欲望はこれでもまだ治まらない。格闘家としてより惨めなフィナーレを飾るべく、男は美月の仮面に手をかけた。

「仮面美少女ファイターもこれで終わりだな！　見ろ、これがマスク・ド・ミツキの素顔だ！」
　仮面格闘家にとって、シンボルともいえるマスクを剥がされるのは試合に負ける以上の意味を持つ。美月は仮面ファイターであることにこだわりを持ってはいなかったが、正体を明かされてしまうことは潜入失敗と同義だ。
　失神している美月に抵抗できるはずもなく、マスクを剥ぎ取られ晒される素顔。カメラがズームで近づくと、その圧倒的なファイトスタイルからは想像もできなかった可憐な容貌が露わになり、敗北とは別の意味で歓声が沸いた。
　美月は知らない。
　この屈辱のリングを仕組んだ美魔女が遠くで嘲笑っていることを。
　正義の変身ヒロインにとっての敗北の鐘の音は、朱麗蘭にとって逆襲開始を告げるゴングだった。

※体験版は以上になります。
　続きは製品版にてお楽しみください。